

浄土

購読ご希望の方は受付まで



1996 5 May



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。

 0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

連載 名刹を訪ねる

阿育王山 阿弥陀寺

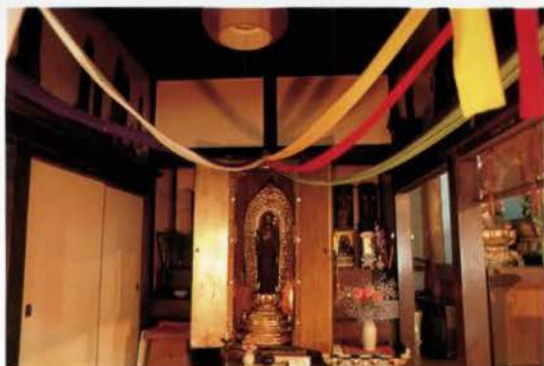
撮影 小堀祐



阿育王山 阿弥陀寺

箱根の入り口、湯本はいつも観光客であふれている。阿弥陀寺は観光マップにも載る寺で、ちょっとハイキングがてらにという参拝客も少なくない。本堂は230年前に小田原の庄屋の家屋を移築したもので、4年かけて組み立てたという。ついこないだまでは藁葺きだったのが雨漏りにたえかね屋根を改装した。玄関をあがると客間兼寺務室で、右隣にいろり部屋がある。左隣の建物中央が本堂、そしてその奥が寺宝などの展示室になっている。





阿弥陀様の両隣の菩薩は正座している。



本堂手前の山の中腹にある阿育王塔。



枯れ池には花が咲く。

およそ400年前に弾誓上人が修行した洞窟は上人が籠もる約200年前に修験者たちによって掘られた洞窟だという。とても深いこの洞窟の中で弾誓上人は念仏を唱え、南無阿弥陀仏と石板に彫った。右は弾誓上人が使っていた鉄下駄や丈、伏せ鐘、石仏の頭も上人が掘ったものという。左が住職が筆でかいた洞窟への案内図。





住職自筆の三箇条。
上は愛用の碗だ。



ボケ封じのお地蔵さんは人気です、と住職。



——本文42ページへつづく。



住職は御詠歌を歌いながら見事に舞う。



浄土

1996/5月号 目次



カラーグラビア 連載<名刹を訪ねる>.....	撮影＝小堀祐二	3
私は駄目人間	本誌編集部	8
電話のなかの声.....	鈴木永城	12
法然上人と私	正村瑛明	20
二人のジョナサン	坂爪逸子	26
漱石の『こころ』を読む	今西順吉	34
名刹を訪ねる	真山 剛	42
報告 別時念仏会と研修会		50
NEWS 唱導師厳修		54
表紙の言葉	石井敏之	57
コラム		58
J フォーラム		59
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 祝下

表紙撮影＝石井敏之

アートディレクション＝近藤十四郎

御法語に聴く

私は駄目人間

本誌編集部

わが身はこれ煩惱を具足せる罪惡生死の
凡夫なりと深く信ずべし。

(法然上人一淨土宗畧抄より)

一、念仏の華ひらく

法然上人は、

「私は戒律を守ろうとしても、一つとしてこれを守ることが出来ない。心を統一しようと努力してもそれが出来ない。惑いを断ち悟ろうとしても、正しい知恵を身につけることが出来ない。何という愚かな、罪の深いだらしない人間であることか。こんな私でも仏様は救って下さるのだろうか」

と嘆かれ、二十五年もの長い修行の中で、大藏經を五度もお読みになった。

大慈悲の仏様なのだから、どんな人でも救って下さる筈だが、と名僧と言われる方々に教えを乞われたが、

そんな駄目人間の救われる道はない。と空しい答が返って来るばかりだった。

悟った人は何人いるか知らないが、高位高官の人も、お坊さんたちだって碌でない者が一杯いる。まして一般庶民は教養も学問もなく、仏の教えなどには全く縁がない。

この人たちは救って頂けないのか。みんな地獄へ落ちなければならぬのか。

絶望のどん底に落とされた上人は、泣く泣く經典をひもとかれたのであった。

そして遂に、

「どんな人でも念仏を唱えれば、阿弥陀様は必ず救って下さる」

という教えを見出されたのである。

その時の感激を上人は、

「歓喜のあまりに、聞く人なかりしかども…
歓悦髓に徹り、落涙千行なりき」

と仰っている。

それはまさに、今までの国家鎮護の仏教から、一般庶民の魂の救済を目指す新しい仏教、

鎌倉仏教の開幕であった。

ヨーロッパにおいて、マルチン・ルターがキリスト教の宗教改革を行ったのは西暦一五一七年であるから、法然上人は彼を遡ること三三二年も前に、仏教の歴史的な大改革をされたことになる。

上人は釈尊以来の、世界で最も偉大な思想家であることは、これをもっとも知ることができる。

浄土宗の第二祖聖光上人は、

「わが大師釈尊は、ただ法然上人なり」と仰っている。

上人のお陰で、日本仏教の新しい大きな幕が開いたのである。

二、善人はいない

さて上人の念仏の教えの前には、世間でい

うところの聖人や善人などは一人もない。

人間の尺度とは次元の違った、仏の尺度から見れば、全て悪人である。だからこそ悪人である私たちに向かって、阿弥陀様は大きな慈悲の輝く光を注いでおられるのだ。

人間の尺度など知れたものだ。

立派な人と思っていた国立大学の教授が悪事を働き、住専関係金融機関の地位ある人達の、庶民では考えも及ばないおぞましい貪欲の結果が、いま日本国中を騒がせている。

仏から見れば、生まれながらにして彼らも極重悪人だったのだ。

といつても、私は彼らを決して軽蔑しない。私も彼らと同じ様な場面に直面すれば、同じ事をしたかも知れない。

悪人と自覚して、教えを信じ念仏を唱えれば彼らも隔てなく救って頂けるのである。

俺は悪事などしない善人だとして、懺悔の

心のない者は、仏に背を向けた傲慢な人間であり、念仏の教えにあずかることなど望むべくもない哀れな輩である。

三、駄目人間としての自覚

念仏を唱えるには、三つの心が大切だとされている。

その一つを「深心——じんしん」という。

深く信じる心であるが、何を信じるかという、その一つは、

「わが身は煩惱の固まりであって、とても仏の救いに預かることなど、望むことのできない罪惡生死の凡夫である」

言い換えれば、自分は「駄目人間」だと深く自覚することだ。

「私は凡夫です」と言う人は少なくないが、その言葉を聞く度に、「仏の前でも言えます

か」とその人に尋ねたくなる。

本当に自覚しているなら、

「お前は馬鹿者だ。不実者だ。欲の凝り固まりだ。風上にも置けない駄目人間め」

と罵倒されても、

「お教え頂いて有り難うございます。南無阿彌陀仏」

とその人に向かい、感謝の合掌が出来なければならぬ。それが出来てこそ「凡夫と自覚しました」と仏に言えるであろう。

そうなれば一切の気取りも無くなつて穏やかに念仏の日々を送れるようになるだろう。

(文責・大室了皓)

電話のなかの声

仏教テレフォン相談

仏教情報センター代表幹事
曹洞宗 東陽寺住職

鈴木永城

最近、どこへ行っても「インフォメーション（INFORMATION情報・案内）」

という文字が目につき、また耳にします。今や電話一本で、あらゆる情報が得られる時代になりました。

一例をあげれば、NTTの「ハローダイヤル」がそれで、買いたい、借りたい、習いたい、食べたい……。こういった問い合わせに、オペレーターが即応してくれる仕組みです。

医療や法律、白アリ退治からカビ防止に至るまで、私たちの生活上の万般に、インフォメーションが張りめぐらされております。

そして今日では、ファックス、パソコンが普及し、インターネットまでも登場しました。文字と記号、映像が組み合わせられて、言葉のやりとり抜きて「会話」が成立してしまうという、恐ろしいほどの便利さです。

つくづく思いますのは、文明の進歩には、「骨身を惜しまぬ生き方」を捨てさせ、「骨身を惜しむ生き方」を追求させる、そんな魔力が秘んでいるような気がします。たしかに「転ばぬ先の杖」ともいいますから、文明の利器は、大いに活用されるべきでしょう。

けれども、余りにも杖を過信しすぎて、自分自身の足腰の鍛錬を疎かにしたり、杖だけを一人歩きさせるのでは、薬を毒にするようなものです。それでは「人間性の喪失」であり、「人間不在」の社会でしかありません。

情報化のウネリは、さらに高度化し、日常化することでしょう。だとするならば、受け

手である私たちの心と情報を、バランスよく保たせる智慧と工夫が必要となります。

つまり情報は、それなりの目的や、何らかの意図が含まれて伝えられるものですし、一部分を誇大に強調したり、隠蔽^{いんぺい}したり、虚飾をほどこしたりといった操作も、出来ないことではありません。

「炙出^{あぶだし}」のようなもので、火にあぶって見て、初めて虚偽の深さが浮きぼりにされた、大事件もあつたほどです。企業からの献金、住専、HIV、TBSテレビの報道姿勢などがそれです。狂牛病の問題にしても、イギリスだけの事例ではなく、大事には至りませんでした。過去の日本にもあつたという指摘も、見過ごしてはならないでしょう。

健康食品にしても化粧品^{けしょうひん}にしても、その情報は製造・販売会社から、広告という形で一方的に流され、私たちを殊更^{ことさらに}に幻惑させる要素を持っています。これが現実であつてみれば、正しい情報を選択するという耳目を、こちら側が養っておかねばなりません。

虚偽・虚構は、残念なことですが、「宗教」の名でも行なわれております。世界統一神霊協会、オウム真理教の実態が、大きな社会問題として論じられてきましたが、それ以外にも、霊観・霊視商法を中心とした被害は続出しているのです。

宗教をも取り込んだ、こうした時代背景の中で、私たちが「仏教情報センター」を設立したのは、昭和五十八年のことでした。

伝統仏教といわれる各宗派の有志僧侶が結集し、「仏教テレフォン相談」を中心に、活動

を開始しました。十三年間の間に、もたらされた相談は八万三千件を上回ります。

設立当時をふりかえりますと、「水子供養」に名を借りた霊観（感）商法が、すでに罷り通っておりまして。その頃、水子供養は一種のブームを呼び、供養に応ずるお寺もありましたが、何ごとによらず、タメにする悪徳な人間はいるものです。

「供養」を口にしなが、実は「霊障」（たたり・さわり）を商品化し、これを強要するといった手口で、多額な金額をむしり取っていたのです。

水子が該当しなければ、もっともらしく「浮かばれぬ先祖」を^{でっ}持ち上げ、「開運」のためのツボや塔を買わせるといったケースでした。

資料によれば、被害として届けられたものだけでも、一万三千四二九件。金額としては百八十三億三千五五四万円で、一件当りの被害額は、ざっと百三十六万円をこえます。ただしこの調査結果は、昭和五十九年から三ヶ年間だけのものですから、開いた口がふさがりません。

仏教情報センターには、被害者本人から、あるいは市区町村の役所、消費者センターなどから、この種の相談や、苦情の訴えが、数多く寄せられました。

犬も歩けば——、というほどの勢いだった「水子ブーム」は、この頃ではすっかり下火になりました。しかし「霊視商法」は「霊視商法」として衣を変えただけで、その裏には相変わらず、鋭いキバを隠しもっております。

「観」(感)と「視」、あるいは理不尽な手口を厳密に区別することはできませんが、物品(ツボ・多宝塔・神仏具・印鑑・健康食品など)ではアシがついてしまうためか、最近の例では、修行とか祈禱といった手段を用いるケースが多いように思います。「超能力」などといった精神面を、謳い文句に掲げているのが、共通した特徴です。

ところで、こうした相談が届くのは、もうニッチもサッチも行かなくなっているから、というのがほとんどで、やりきれない思いがいたします。一体、何が要因となっているのでしょうか。

その顕著な傾向をあげるとすれば、全国的に進んでいる都市化の現象だと思っています。人口が都市に集中し、核家族化が急速に進んだ結果、昔ながらの地縁、血縁といった「絆」が、たるんでしまったところか分断され、人間関係の寄りどころが見当らなくなったのです。

お墓の相談などでよく耳にする、「私が先祖の第一号です」という言い方には、本人はともかく、言い知れぬ寂しさを感じます。

当然、実家とか本家とか菩提寺との関係は希薄で、是非はともかく「イエ」の観念は乏しく、「無宗教」の意識ばかりが助長されることになります。

科学により生活の合理化が進んだとはいっても、私たちを取りまく環境や人生そのもののまで、そうであるとは限りません。予期せぬ事態が生じた時、絆の無い人々は、往々にし

てワラをつかむ破目に陥りかちです。

判断材料が必要なことから、不安定な心理状態の中で決定してしまうのです。

「街を歩いていたら、アンケートを求められ、それに応じると、本部とかにさそわれ、『貴方が使っている印鑑には、先祖の犯した罪が悪影響しているので、良いことがないのです。』といわれ、迂闊にも三本二十四万円の印鑑を買わされてしまった。」

「手相を見てもらったら、『このまま渡航すれば外国で命をおとすから、護身用の数珠を求めなさい』と強要され、ご祈禱済みだという九十万円の数珠を買わされた。」

「主人が亡くなり、葬儀屋さんに南無阿弥陀仏を唱える宗派だといったら、浄土宗の僧侶が来てくれました。後で親戚の人から、代々浄土真宗なのに、法名も違うから浮かばれないといわれた。」

「妻が亡くなり、東京で葬儀をしたが、菩提寺にお骨を持っていったら、筋が通らないから葬儀をしなせといわれた。」

仏教テレフォン相談には、こうした相談もしばしば舞い込みます。当初は、各種のお布施の金額、仏壇やお墓の祀り方、法事のマナーなどが主流でしたが、最近では人生や家庭、職場など、人間関係についての悩み事相談が多くなっています。

先ほどもふれましたが、つまりは都市化によって地縁・血縁の協力関係が薄らいだ証左だと思えますし、寺檀関係も同様です。

新幹線が、時速三百キロの試運転に成功し、日本列島は、ますます狭いものとなるでしょう。だからといって、疎遠になった人と人の心を身近かにはしてくれません。むしろ反比例の方向をたどるのでと、危惧の念を強くします。

しかし一方では、心の寄るべとして、仏教を求める気持ちは強まっております。誤った方向につき進んだとはいえ、オウムや、他の新興宗教、新々宗教の青年信者の姿に、それを伺うことができます。

また、こうした宗教の持たす悪影響を知るに及んで、伝統仏教を見直すという気運も高まりはじめた、と推察しております。といっても一ヶ寺だけで、一般の人々の多様なニーズに応えることなどは、所詮、不可能なことです。

八十年代から、さかんに「これからは心の時代だ」と叫ばれながら、今日に至っておりますが、社会の精神状態は、もうギリギリのところにさしかかってはいないでしょうか。

こうした世相を反映してか、夫婦問題の相談も、別居・離婚を前提においた質問も増えてまいりました。また、僧侶になりたいといった希望も、まま聞くところです。

私たち仏教情報センターは、伝統宗派の和合僧の集団として、これからは仏教への窓口係に徹していきたいと思っております。また研究部門であります。仏教ホスピス部会、仏事信仰問題部会、仏教カウンセリング部会を充実させて、現実社会との対応の中で、仏教による日常生活の水先案内役が果たせるよう、自己研修にも精進したい所存です。

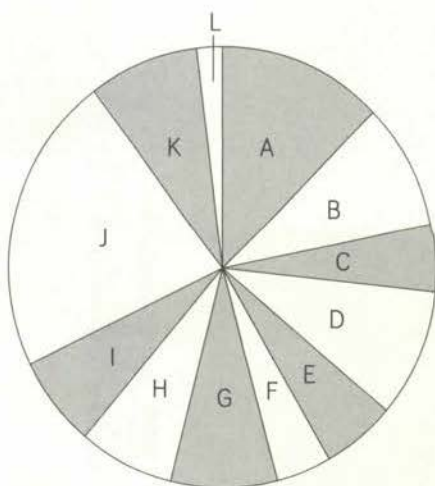
平成6年度仏教テレフォン相談分析表

平成6年6月～平成7年5月
(12年目)

相談者数	3,701人
相談総件数	4,299件
相談室開室日数	254日
1日平均相談数	169件

■大分類

A	布施他金銭	539	12.5%
B	墓、お骨	399	9.3
C	仏壇、位牌	213	5.0
D	法要他仏事	404	9.4
E	供養	240	5.5
F	日常問題	189	4.4
G	慣例等マナー	337	7.8
H	信仰問題	318	7.4
I	学問的問題	287	6.7
J	人生相談	937	21.8
K	情報紹介	355	8.3
L	その他	81	1.9
		4,299件	



法然上人と私

共に生きる

東京北区・正受院住職
大本山増上寺布教師

正村瑛明

人は何によって動かされるのか。

それは、決して高遠な言語によってではない。

たとえそれが細やかな行為であっても、人はその精神の高さに感動させられるのではないだろうか。

私は、そう考えている。

ある日、なにげなしにつけたテレビが、私の心をとらえた。

画面いっぱい、白髪、白いあご髭、ニコニコ顔の男性が映し出され、アナウンサーのインタヴューにこたえているところであった。六十半ば位のその男性は、ネパールの肺結核撲滅運動を支援すべく、日本からネパールの一寒村に入った医師である。

先生は、おおよそ次のような話をされた。

ある時、診療所に頭を血だらけにした子供がとび込んできた。

すわ一大事と、細心の注意をはらって診療をしたが、どこにも傷らしい跡がない。

こりや一体何だろうと思案していると、そこへ両脇をかかえられたやせ細った御婦人が運び込まれてきた。一目見て重い肺結核患者である。

この運び込まれてきた婦人の姿を見て、先生の子供に対する疑問が氷解した。

この婦人は母親で、その母親の吐血をたまたまそばにいた子供が頭からあびてしまったのだ、と理解することができた。

診察の結果、案の定、この小さな診療所ではとても手に負えぬことがわかった。

一刻も早く、峠をこえた向うの大きな町の大きな病院へ運ばなければ大変なことになる。早速、先生は、村人たちに人夫方を依頼した。

しかし、折り悪しく村は農繁期で猫の手も借りたい程忙しい。豊かな村であれば、仕事の手を二、三日休めて、手を借しましようという村人もいたであろうが、何しろ、貧しい村である。仕事を放り出すわけにはいかない。

この時期に休むことは、自らの生活の破滅を意味するのである。

結局、この婦人患者を背負って町まで運んでくれる者は一人も現れなかった。

先生自身が、この患者さんを背負ってもよかったが、峠をこえてゆく自信はなかった。山の途中で、先生が倒れたら、それこそ共倒れである。そんな危険を犯すわけにはゆかない。

かと言って、放っておくこともできない。途方に暮れたクリスチャンである先生は、神様に祈ったそうである。

「神様、どうか、この婦人を救って下さい」
医師として、最善を尽くして、なお祈る。

この先生の心が通じたのか、一晩祈った翌日、ひょっこり見知らぬ青年が訪ねてきた。ボロボロのシャツに裸足のその青年は、私が背負って町まで運びましょうと申し出てくれた。

先生は、喜んでお願いをした。

早速、準備をととのえ、患者を背負ったその青年について、先生は、苦しい苦しい峠越えに同行したのである。

先生も苦しかったが、いかにやせ細った患者とはいえ、人間一人を背負ってゆく青年にとっても、かなりきつい峠越えとなったことは言うまでもありません。

黙々と峠をこえてゆく二人。幾度も幾度もくじけそうになりながら、ひたすら町をめざしてゆく。

想像を絶する苦闘の末、それでも、ようやく峠をこえて、町の病院にたどり着くことができた。

当然のことながら、患者はその青年に礼を述べた。そして、先生もまた最大級のことはをもって感謝を現し、御礼の意を込めて、通常の賃金にプラスアルファの心付けを加え、その青年にお金を差し出したのです。

ところが、その青年は半歩退いて申します。「いりません。」

先生が、何度、正当な報酬だと言っても、「いりません。」

の一点張りです。

やがて、青年は、きつぱりと言ったそうです。

「私には、体力と時間がありました。それを私は差し出ただけです。そのことで皆さんはとても喜んで下さいました。その喜んで下さったことが、私の賃金です。」

生きるということは、共に生きるということとです。共に生きるということは支え合って生きるということです。弱き者と共に。

私には、お役に立てた喜びがあります。その喜びで、私は充分満足しています。」

そう言い切ると、さわやかな笑顔をのこして立ち去っていったのです。

あつという間のことであったが、先生はこの青年のことを「神の言葉」と受けとめ、「生きるということは、共に生きるということです。共に生きるということは、支え合って

生きる、分かち合って生きる、弱き者と共に。」と紙に書きとめ、診療室や居間の壁に貼って、自らの戒めとしているということです。そのあたりで、私は用事のためテレビを離れた。テレビを離れたけれど、このお話は深く心にのこった。

その青年の口から飛び出した「神の言葉」を彼自身どこで教わり学んだのであろうか。

ボロボロのシャツに裸足の青年の生活は、決して豊かとはいえない。貧しく厳しい生活に違いない。

だから、支え合ってゆかねば生きてゆけないのではないか。

しかし、その厳しい生活を通して、支え合うことの尊さ、分かち合うことの喜び、助け合うこと、共に生きることの嬉しさを身をもって学んだのでありましょう。

そして、その精神が彼をして苦しい峠越えを決意させ、町の病院までの道を歩かしめたのではないのでしょうか。

この天地には「弱き者と共に生きん」という願いが、いのちの願いが満ち充ちていて、人をして動かしているのではないだろうか。そこに、私は感動させられたのである。

半年前、国際ペン東京大会の開会式で、今は亡き作家の井上靖先生は、次のような文を引用されて、世界の人々に強く平和というものを訴えられました。

「もう、自分一人の幸福を求める時代は終わった。ほかの人が幸福でなくて、どうして自分が幸福になれるだろうか。」

もう、自分の国だけの平和を求める時代は終わった。ほかの国が平和でなくて、どうして、自分の国が平和であり得よう。」

これは、小笠原諸島硫黄島の南の丘の上の黒御影石に刻まれている碑文の結文です。

二十二平方キロというこの小さな硫黄島に何と百万発以上の砲弾がうち込まれ、日米両軍人はもとより、島民も合わせて二万七千有余の方々が亡くなられた沖縄と並ぶ最大の激

戦地となったところです。

その碑文には、こう刻まれております。

「悲しい海、悲しい空、今日も真青（まっさお）に澄んでいます。あなた方の悲しい死によって、あなた方の悲しい死を通して、私たちは今ようやくにして一つの考えを持つことができるようになりました。」

ということばではじまり、前述の井上靖先生の挨拶の文へと続き結ばれております。

昭和二十年の平均寿命が、男二十三・九歳女三十七・五歳という数字だけみても、如何に戦争というものが愚かで悲惨なものかがわかります。

「戦争は人の心の中におこるものです。平和もまた心の中にうちたてなければならぬ。」

とユネスコ憲章の前文にあります。心の中に平和を約束してくれる教えが仏教であります。

十四歳で父と死別し、部族間のすさまじい

抗争の中で、世間虚偽を痛感し、唯（ただ）仏（ほとけ）のみ真実と悟り、十七条憲法を制定された聖徳太子は、和を似て貴しとなす」と和国建設を身をもって唱導された。

又、昭和二十六年九月、サンフランシスコ対日講和条約締結にあたって、セイロン（現スリランカ）代表として出席したジュニア・ス・リチャード・ジャヤワルデネ大蔵大臣（のちに大統領となる）は、

「人はただ、愛によってのみ憎しみを越えられる。人は、憎しみによっては憎しみを越えられない。」——法句経五——

というお釈迦さまのことばを引用して、日本への賠償請求を永遠に放棄した。

「敵人を恨むことなく、一向に専ら自他平等の救いを祈り、怨みことごとく消えて、親疎同じく菩提に至らんことを願うべし。」

とは、夜討ちに遭って絶命する法然上人の父君四十三歳の時国公の幼い法然上人（幼名勢至丸）に対する御遺言であります。

敵人を恨むことなく、ひたすら自他平等お救いを祈り、怨みことごとく消えて、親しい者もそうでない者も同じように悟りの彼岸へ幸せの世界へ生まれかわるよう願いなさい。この法然上人の父君をして言わせしめた願いこそ人類の悲願でありましょう。

宗祖法然上人は、この父君の遺言忘れがたくして、四十三歳、お念仏の道を開かれたのであります。

阿弥陀如来さまが、法然上人さまが、この弱き私を包み、見捨てることなく共に歩いて下さるならば、私はこの道をお念仏の中に歩いてゆきたいと思えます。

合掌

二人めジ ヨ ナ サ ン

坂爪逸子



18m夢ジャンプ

7日、世界陸上競技選手権の男子三段跳びで史上初の18m台の世界新をマークしたジョナサン・エドワーズ（英国）。2回目に18m29cmの大ジャンプを決め、着地寸前のフォーム＝ロイター（10面に記事）

去年ビッグな飛躍によって、二人のジョナサンが、私たちに明暗対象したショックを与えた。

一人はボロボロになるまで読んだ『かもめのジョナサン』一冊を両親に残してオウム真理教に出家した村井秀夫氏。いうまでもなく、以後村井氏は「かもめのジョナサン」になり切り、空中浮揚に熱中して、オウム真理教のナンバー2になっている。そのため『かもめのジョナサン』は何故優秀な若者がオウム真理教に走ったのかという謎がわかる参考書として、全国の本屋の店頭で平積みされたほどであった。あらゆる意味で現実を逸脱して空中浮揚してしまった、無極端でもないオウム真理教を支えていたのが、こうした「かもめのジョナサン」になりきってしまった、多くの純粹粗雑な青年たちであった。私が彼らを「かもめのジョナサン」と呼びたいゆえんである。

そしてもう一人ビッグな飛躍をしたジョナ

サンは、八月七日陸上世界選手権の三段跳びで、「十八メートル夢のジャンプ」を達成した、ジョナサン・エドワードである。

この二人のジョナサンの明暗対象した飛躍に私がこだわるのは、『法然上人絵伝』で、近所の子供達の中心になって、竹馬遊びに熱中している法然少年の姿に、浄土宗を立宗されたすべての原点があるとみているからである。実際私には、竹を馬にみたててまたがり、楽しく飛びはねている法然少年の姿と、十八メートル二十九の驚異的ジャンプを決め、着地寸前の軽やかなエドワードの姿とが、全く重なってみえたのである。このエドワードを称えた『朝日新聞』の記事を読んだ時、私は思わず「あつ法然が語られている」と、家族に口ばしっていた。この時、高蔵哲也という署名入りでエドワードの驚異的飛躍を見事にとらえた、『平凡』な男の『非凡』な記録」と題する文は次のように語っている。

「いつもにこにこ笑っている。十八メートル

二十九の大記録を出した時もそうだった。緊張が高まる一瞬なのに、助走に入る直前も笑みを浮かべている。

『期待されているからプレッシャーは当然。だが、僕は競技者である前に、よき父であり夫でありたいんだ。』

平凡な幸福に喜びを見出す男が、非凡な記録を残した。：決勝に残った他の選手に比べると見劣りがする。その細身の体が跳躍に入ると大きく見えた。助走のスピードがそれほどなくても、跳躍がリズムカルで大きいからだろう。三度の飛躍を楽しんでいるかのようだ。敬虔なクリスチャンで、日曜日に競技するのを拒否したため、東京の世界陸上への出場を逃したこともある。信仰と競技のはざまに悩んだ末に出した結論は、『たった三回跳ねるだけのことじゃないか。』

世界記録を出して、競技場が騒然となつてゐるのを氣にかけた。『他の選手の競技の妨げにならなかつただろうか。』偉大な記録を作つ

ても、繊細な思いやりを忘れなかった。』

実際その晩のすべてのニュースキャスターが一樣に驚嘆したのが、全く力みや無理のない、彼の自然で軽やかな飛躍であつた。中畑清氏など、『ビヨーン・ボン・ポーン』という、まるでごむまりのような表現で感嘆していた。この飛躍を可能にした力は平凡にあると、朝日の記者は、エドワードの天性の才や努力を無視するほどに、彼の平凡に新鮮な驚異と賛嘆を現しているのである。三浦梅園は、『枯木に桜の花が咲くのではなく、桜の木に桜の花が咲くことに神秘がある』という意味のことを語っているが、まさにエドワードこそ、平凡の中に非凡が宿り、当り前の中に神秘が宿っていることを、世界中の人々に、その軽やかな飛躍とつましい言葉で示してくれたといえる。

結論から語るなら、この平凡と非凡、当り前と神秘を結びつける鍵は、大地に対するエドワードの無限の信頼にある。大地を跳躍台

にして軽くピョンと飛びはね、そして楽しむがごとく柔らかくポーンと大地に着地する彼の姿は、彼が全身全霊大地を信頼し愛していることを現しているのである。いうまでもなくこの大地は、彼が競技者である前に平凡なよき夫、父となって築いた、安定して幸せな当り前の家庭も含んでいるわけである。

「プラトンの飛躍」

実は私が竹馬遊びに熱中している法然少年に注目したのは、プラトンが、子供にエドワードのような飛躍を体育術として教えることが、健全な生命力のすべての源泉となると強調していることであつた。そしてエリクソンという精神分析学者は、このプラトンに最も簡潔で優れた遊びの定義を発見して、子供たちは遊びを通して、プラトンの飛躍を身につけていくことに重大な意味を見出したのである。というのは子供の遊びは、すべて飛びはねることへの欲求にはじまっているからである。たとえば子供の遊びの中心のこっこ遊びである。法然の竹馬やお馬こっこであるように、戦争こっこ、汽車こっこ、あるいは女の子の静かな人形こっこに至るまで、子供たちは空想の世界へ身や心を飛躍させて遊ぶのである。こうしてプラトンの飛躍を身につけていくわけだが、その際エリクソンが絶対必要な前提条件としたのが、両親が子供に安全な環境を保障することである。何故ならプラ

トンの飛躍体育術とすることは、

「大地を飛躍台にして使う仕方と、柔らかに安全に着地する仕方を学ぶ。それは様々な制限の中で許される自由な活動余地を試みること、重力には打ち勝つがしかしそれからは逃れられない制限を知ることである」

からである。ここからすぐに、健全な生命力の源泉を具体的にイメージすることは困難である。しかし遊びを欠如して育つたために、こうしたプラトンの飛躍の出来ない現代の青少年の欠点は容易に理解できる。この言葉に對して反射的に、「アーだから今の若者はけん

かの仕方を知らないのですネ」と答えた大学生も私は知っている。実際重力の制限を越えて空中浮揚した麻原彰晃の一枚の写真に衝撃を受けて、オウムへ出家した若者に致命的に欠如していたのも、このプラトンの飛躍であった。それを如実に語っているのが「かもめのジョナサン」なのである。

——かもめのジョナサンは、群れとなつて餌をあさる仲間を見下し、飛ぶことだけに意味を見出し熱中する。その結果、カモメの制限を越えた飛行術を身につけ、星のように金色に輝き出したジョナサンは、天国で師から更に高度な飛行術を教わる。そこで瞬時に未来へも過去へもどこへでも移動出来る飛行術を身につけて、時間も空間もつまり静止を超越した自由を得る。そしてこの自由を仲間へ教える為に下界へ降りてくるのである——

多くの若者が、ここに仏教のさとり(涅槃)を発見して、麻原の空中浮揚に憧れて出家したのである。こうした若者の現実を逸脱した

だけの無惨な空中浮揚に、日本中が戦慄している時、助走寸前まで笑みを浮かべたエドワードは、最高最善のプラトンの飛躍を決めて、私たちに真の自由やリアリティーのある神秘をその体で見せてくれたのである。

私が法然上人の浄土宗立宗の原点を竹馬遊びにおくのも、法然上人の宗教革命を、さとりを快く諦めたところにみているからである。「真如観や空観は、僧が長い間かかって習っても得られないことで、往生のためには無益なことです」(『百四十五箇条問答』と、断言なさっていることにみるからである。実際、「とくとく安樂の浄土に往生して、弥陀・観音を師として、法華経や般若経など……一切の聖教を、思うままにさとりなさい」(『要義問答』)。

というお言葉は、法然上人御自身も、仏にはなれない、人間であることの限界を快く引き受けられたことを証している。それは法然上人が、かもめのジョナサンのように、衣食住を軽蔑してさとりと自体を目的になさら

なかったからである。末法という現実の中で、御自身も含めて庶民がさることの意味を、いつも穢土に両足を踏みしめて真摯に考え抜かれたからである。このためさとりをめざした法然上人の学問や修行は、現実を信頼して人間の限界を越えない快いプラトンの飛躍になっていた。四十三歳にして、さとりを諦めて、「南無阿弥陀仏」と唱えた瞬間の「随喜身に余り身毛ために立つ」ほどの喜びは、現実の大地に、庶民の中に安全に柔らかに着地した瞬間のリアリティーも語っていないだろうか。つまり法然上人は、当時インテリが「末法、末法、世も末だ」と大騒ぎしていた穢土を、安全な大地として信頼なさったのである。これは、学問と修行を極め仏にはなれない人間であることの限界の高さまで魂を大飛躍させた法然上人の視点の高さを語っている。宇宙の極理を智慧としたのが阿弥陀仏の慈悲であると『逆修説法』で法然上人は語っておられるが四十三歳にして、宇宙の中で唯一あた

たかい生命の宿っている地球を見下ろすほどの、魂の大飛躍をなさったはずである。そこから現代語で語るなら、一枚の葉っぱ、一匹のバクテリアも無駄なく、生きとし生けるもので美しく保たれている地球の神秘的な生態系を鳥瞰なさったのではあるまいか。その結果、末法の混乱も、この生態系を破らずに、生態系に含まれて存在するほんの一部にすぎないとみて、柔らかに安全に着地なさったのである。こうした視点の高さで獲得した、大地に対する神秘的ともいえる絶大の信頼なくては、大弾圧も朝恩として淡々と受けとめられた法然上人の、輝くばかりの円満さは理解できない。私がエトワードに法然上人の精神を発見したのも、両者のなしたげた最高最善のプラトンの飛躍にある。

「たかが現世、されど現世」

エドワードは、競技者である前に良き夫・父でありたいと語っているが、実際この地球上に生命が宿って三十五億年、人類が誕生し

て二十万年、地球の神秘的な生態系が守られたのは、私たちがはかない一生を、衣食住を大切にして、寝て起きて食べる当り前の生活を延々続けてきたからである。ライオンはライオンとして、かもめはかもめとしての分を守り続け、桜の木は桜の花を咲かせ続けてきたからである。死後、阿弥陀仏の浄土に生まれて仏になるということも、当り前のことに充足して生きることによって、人類の一員としての責任を果たせば、臨終には永遠に続くであろう地球の生態系を信頼して安心して死んでいける、そういった永遠の相のもとにおける魂の平安も語っているのではあるまいか。敬虔なクリスチャンであるエドワードは、この魂の平安を獲得していたから、よき夫・父として、何よりも当り前の幸福に喜びを見い出したのである。彼にとって日常の安穩と、魂の永遠の平安は、どちらが欠けても不可の車の両輪となっていた。彼は競技と信仰の両つがままで悩んだ末に、「たった三回跳ねるだけの

ことじゃないか」と、日曜日も競技に参加することにしたという。たかが三回跳ねるぐらいでイライラ悩み抜き、参加を拒否して、日常の安穩を犠牲にすることなどないのである。この安穩がこそ、彼に真摯な心からのお祈りと永遠の魂の平安を約束してくれるからである。お祈りするために三段跳びを拒否して、日常の安穩が乱されるなら、三回跳ねた後お祈りすればよいのである。まさに、たかが三段跳び、されど三段跳びである。こうして彼は三段跳びを衣食住と同じレベルの、彼の大切に行っている日常茶飯事とすることによって、お祈り（永遠の魂の平安）とこの世の安穩を車の両輪として守り抜いたのである。彼が自由で非凡な最高最善のプラトンの飛躍を決めた時、その体で表現した大地に対する信頼は、こうした信仰的次元の安全に裏うちされていたのである。法然上人はこれを、つまりどんな一大事もエドワードのように日常茶飯事に安んじて、いつでもお祈りできるように現世を安

穏な状況に保って生きることを、大工の禪勝房に次のように語られているのである。

「現世生くべきようは念仏の申されんように生きなさい。念仏の妨げになるものはなんなりと、これを嫌いてとどむべし。聖で申されないなら妻を得て申しなさい。妻帯して申されないなら聖で申しなさい。一所に定住して申されないなら、遍歴して申しなさい。……自力の衣食で申されないなら他力で申しなさい。……衣食住の三は念仏の助業です。自身安穩にして念仏往生をとげるためには、何事も皆念仏の助業です。……往生ほどの大事を励みて念仏申さん身をばいかにいかに育み助くべし」と。

法然上人ご自身も、大弾圧を日常茶飯事のように安穩に受けとめることによって、念仏を守り抜かれたのである。ここで、現世を念仏を申すためになくなはならぬ助業としている、法然上人のお言葉が示唆していることも念仏そのものが私たちにプラトンの飛躍（健

全な生命力）を祝福していることである。

坂爪逸子（さかづめ・いつこ）

宗教研究家

一九四二年十一月一日生

一九六五年 岐阜薬科大学卒業

一九六七年 京都大学薬学部修士課程中退

著書に『遊びの境界法然と親鸞』（青弓社）

『転形期法然と頼朝』（青弓社）

新
連
載

漱石の 『こゝろ』を読む

北海道大学前文学部長

今西順吉



夏目漱石の小説『こゝろ』について考えてみたい。漱石も、『こゝろ』も、すでに論じ尽くされて、いささか手垢にまみれた観があり、何を今さらと思うむきもあるかも知れない。確かに世はまさに漱石ブームと言われ、書店には漱石関係の書物が溢れかえっている。しかしそれらが漱石作品に対する態度はあたかもパズルを楽しみ弄ぶもてあそぶような趣が感じられて、快くはない。かつてはもつと真面目に、真剣に漱石に対していた。ここ四十年間の漱石研究の傾向は、過去の生真面目な姿勢が「漱石神話」を生みだしたのだという批判を旗印に、強力に「非神話化」を推進してきた。西洋の十九世紀が遅れてやってきたように、苦笑を誘われるけれども、その主唱者達もますます力を入れようとしているから、この矛盾は何とも理解に苦しむ。

問題は極めて簡単である。漱石は生涯にわたって「心」を問い続けていたのであるから、漱石は結局「心」をどう捕らえていたのか、

この問題が基本であり、これが漱石問題の核心である。これに答え得ない「研究」は研究の名に値しない。

さて、心とは何か。これはあらゆる学問に共通する問題であるが、特に宗教、哲学、さらに心理学などの中心的な課題である。しかしどのような立場から心を取り上げるとしても、心は本来的に「自分自身の心」であるから「自分」を離れては議論出来ないはずのものであるが、科学は客観的な実証主義に立脚するので、外側から観察・測定して分析することは得意でも、主観的な「自分」や「自己」は直接の研究主題にはなりにくい、このような科学的実証主義は十九世紀の産物であり、明治開国とともに日本に輸入され、漱石も学生時代にその洗礼を受けて、心や霊の心理学的研究に関心を寄せていた。仏教・禅や老荘思想・漢詩文などの伝統的な人間観と近代の科学的合理主義をめぐる当時の精神的葛藤は、現代のわれわれが想像する以上に深刻なもの

があり、漱石もまたその狭間にあって苦悩していたことはよく知られているところである。

もとより西洋においても事情は同じであった。すべての学問が科学と同様に厳密でなければならぬとすれば、主体的な自己をどのように扱うべきであるのか。そこで採用された方法がありのままの自己を記述することであった。この方法は文学に近い。キルケゴールやニーチェでは神学・哲学と文学との境目は希薄となり、文学的表現に新しい生命が吹き込まれたことになった。インドの詩聖タゴールが世界的評価を与えられたのも、インド思想の影響を強く受けているホイットマンが出現したのも、同じ世界的潮流においてであった。漱石もまた文学こそよりよく自己を表現することの出来る方法であると考えて小説家になった。漱石の世界的地位はこのように理解されるべきである。

蛇足ながら、「ありのままの自己」を描くと言えば、日本文学における自然主義を思い起

こすかも知れない。確かに自然主義は西洋文学の影響下に起こったには違いないけれども、日本の自然主義・私小説の系列はこのような世界文学の系列とは区別して考えるべきである。漱石は日本の文壇に容れられなかったという名誉を担っているが、当然である。『道草』を読んだ正宗白鳥は、ようやく漱石も自然主義的になったと評価したが、たまたま『道草』が自然主義と不幸な接点をもっただけのことで、『道草』は誤読されている。

さて、『こゝろ』は漱石の代表作の一つである。『こゝろ』は大正三年に朝日新聞に連載された。そして単行本として出版する際に漱石自身次のような広告文を書いた。

自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む。

この広告文から知られることは、第一にこの小説の主題が「心」であることである。小

説の題が『こゝろ』であるから当然であるが、『こゝろ』の研究者たちはこの当然のことを忘れていたので、自明なことでも念を押しておかなければならない。次に漱石はここで「自己の心」と「人間の心」という二つの言い方をしている。小説の「物語」は特定の登場人物によって特定状況の中で繰り広げられるのであるから、その物語で描かれる「心」は特殊な場合の「心」である。それが作者自身の心を反映しているならば、それは漱石にとっての「自己の心」であり、いずれにしても特殊例であることに変わりない。しかるに漱石は、ここで描いたのは「人間の心」、「人間」一般に通じる「心」である、と言う。「人間の心を描へ得た」ということの意味は、漱石自身の述べた「自己の心」が、とりもなおさず「人間の心」でもあるということではない。漱石は「人間の心」は「自己の心」を描へんと欲する人々、誰にでも共通すると言え

ることになる。広告文は簡潔であるけれども、その趣旨はこのように理解される。これはかなり大胆な、思い切ったものの言い方である。広告文のいう通りであるとすれば、『こゝろ』は誰にでも共通する「人間の心」を描いていることになるからである。何故作者はそこまで自信をもって言い切ることが出来たのだろうか。その根拠は一体どこにあるのであろうか。

これを単純に誇大広告と見るべきではない。漱石の門下生の一人であった岩波茂雄が岩波書店を興し、最初に出版したのが漱石の『こゝろ』であった。若い岩波茂雄は漱石から出版許可を得るとともに、出版費用も漱石から借用した。いわば漱石の自費出版のようなものである。そのこともあって漱石は初めて自分で本の装丁もした。従って単行本『こゝろ』の出版に関しては漱石が全部自分の手で、自分の責任でやったことになる。そして漱石の名前はすでに確立しており、特に『こゝろ』

の売上を氣遣つて宣伝する必要もなかった。出版社の制約を受けることなく、まったく自由で、自分の氣に入つた形で『こゝろ』を出版することが出来た。従つて自分の本意を歪めてまで誇大に宣伝する必要は少しもなかった。元來漱石は意圖して虚偽の誇大表現をする人ではないし、自分の作品の広告文に自ら嘘を書くような不誠実な人ではない。このような事情があつたのであるから、広告文は漱石の真意をありのままに表していると見てよい。

さて、漱石は自分の作品が人間一般の心を描いていると主張する。そして作者は、讀者がこの小説の描く「人間の心」を讀者自身の「自己の心」として読むことを期待している。広告文は讀者にそのように訴えている。すでに小説の中においても「先生」は「貴方」と呼ばれる青年に何度も同じことを呼びかけている。二、三の例を引用しよう。

私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。（『先生と遺書』一二）

私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己を尽くした積です。（『先生と遺書』五十六）

私は酔興で書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものではないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。（『先生と遺書』五十六）

「先生」は青年に期待するとともに、作者は『こゝろ』の讀者にも同じことを期待してい

ることになる。それならば作者はこの作品で「人間の心」をどのように捕らえているのであろうか。『こゝろ』の研究史を通観すると、作者が何を言おうとしているのか、それこそが謎だとされている。そもそも『こゝろ』において描こうとした「人間の心」が何であるのかを的確に捉えた人がいないのである。わたくしの知見の及ぶ範囲内では、作者漱石が期待したように『こゝろ』をきちんと読んだ人はこれまでのところ、皆無であると言っても過言ではない。

一般の読者は驚くかも知れないが、漱石研究の世界に一步でも踏み込んで見れば、研究者自身が『こゝろ』を理解出来ないでいる有り様が一目瞭然である。無理矢理に妙な理屈をつけようとしているだけである。確かに研究文献は無数と言つてよいほど存在するけれども、漱石の本質は少しも読み取られていないのである。信じ難いことであり、わたくし自身も初めは信じられなかった。しかし事実

として、漱石の形骸しかつかまれておらず、漱石の心には少しも触れていない。それが現実である。わたくしは愕然とした。

漱石の『こゝろ』は大正三年に書かれており、その言語は現代日本語とほとんど変わらない。むしろ現代日本の標準的文章語は漱石が作ったとすら評価されているほどである。その作品を現代日本人が読めないということ、言葉の問題であるはずがないから、文章を読む際に必要不可欠な何か基本的な姿勢が現代のわれわれに欠けているに違いない。そうだとすると、これは単に漱石作品を読む場合だけの問題ではないであらう。現代日本の文化や教養・教育の在り方にまで関わる極めて大きな問題であるに違いない。

特に残念に思われるのは、仏教者の精神的怠惰である。仏教者が『こゝろ』や他の漱石作品を読んでも、実に素朴で常識的な理解しか示してこなかったことである。仏教者には仏教者としての考え方・感受性が身について

いるはずであるが、低俗な漱石理解に荷担して平然としている仏教者さえ存在する。もしも仏教者が真に仏教者としての自覚をもつて『こゝろ』を一読したならば、そこに浄土教的な人間観を容易に見出したはずである。実際、『こゝろ』が発表された後の、大正四年二月五日付の『読売新聞』『よみうり抄』欄に次の記事が出ている。

夏目漱石氏は法然上人に就いて執筆すべく目下材料蒐集中なりと

漱石は『こゝろ』の後、法然上人について書く準備をしていた。「法然伝」という形の作品は書かれなかったし、その構想や内容を示す資料も残されていない。漱石研究史上、法然はまったくその視野に入ることがなかったこともあって、この新聞記事に対しても注意が払われることはなかった。しかし『こゝろ』の浄土教的性格は歴然としており、それとの

関連においてこの新聞記事は無視出来ない。そして前述のように漱石は自分が捕らえた「自己の心」が「人間の心」にも通じることが明言したが、漱石がそのように断言し得た根拠を法然に求めることが出来るであろう。漱石は自分が捕らえたと考えた「自己の心」が、法然を媒介とすることによって、まさに「人間の心」に通じるのだと自覚した。言い換えれば、自分が法然と同じ道を歩んでいることに気付いた。そして法然伝を書くことにした。そう考えざるをえない。この時期の漱石にとって、法然は抜き差しならぬ存在になっていた。この問題は仏教者こそが指摘すべきであった。それにもかかわらず、これまでまったく指摘せずにきた罪は決して軽くない。仏教者もまた仏教を単に教義・知識の問題として頭だけで考えて、讃仰することで済ましているのであって、真に厳しい自己反省に立脚して法然をわが身に生きようとしてはいなかったのではないだろうか。事実その通りで

薫香
線香
經典
念珠

浄土宗総本山知恩院御用達
豊田愛山堂老舗

※地方発送受賜ります。

京都・祇園
TEL(075)551-2221番代
FAX(075)525-1806番

あるとするならば、ここにも深刻な問題が潜んでいると言わなければならない。

従来の漱石研究は様々な意味において非常に大きな問題をはらんでおり、漱石作品はきちんと読み直す必要がある。『こゝろ』という小説をどう理解するかは単に文学上の問題にとどまるものではない。近代において文学が自己表現の重要な方法とされたことについては前述したが、文学や哲学や仏教などから截然と区別する日本の習慣は学問の本質とは何

の関係もない単なるセクシヨナリズムであって、前時代的なナンセンスである。漱石の実像はその作品をあくまでも忠実に読み解くことを通じて描かれなければならない。

『こゝろ』は誰にでも開かれており、一部専門家の占有物ではない。そして書物を読むということは、書物の語り掛ける言葉に謙虚に耳を傾けることである。作者が心臓を掻き破る思いで綴った言葉を、虚心にたどってゆくことにしよう。

阿育王山阿弥陀寺

真山剛

古刹を訪ねて

回 | 阿彌陀寺



箱根湯本は温泉地として名高い。

浄土宗のお寺で一番多い名前をご存じだろうか。

この『浄土』を読んでいる読者なら正しい答えをだせるかもしれない。多い順に三つあげると、次の通りだ。

阿弥陀、極楽、西光——である。

調べてみて気づいたのだが、お寺といっても○○寺、○○院、○

○庵、○○社、○○坊など結構いろいろな呼び方がある。『阿弥陀』というのは最後の呼び方にこだわらない時に最も多い名前で、最後が『寺』となると『極楽寺』が一番多い。

そう、西の光り輝く極楽に阿弥陀さまがいらっしゃる。この浄土宗の教え通りにお寺の名前が並んでいる。お寺の名前はおそらく開山したお坊さんをつけるのだろうか、教えを素直に受け入れて来たお坊さんが沢山いた証なのかもしれない。

今回は新緑鮮やかな箱根に向かう。小田急線の終点、箱根湯本から箱根登山鉄道に乗り換え、一つ目の塔之沢という駅から山道を登ると、阿育王山（あいくおうざん）阿弥陀寺がある。全国に百九の阿弥陀寺があるが、阿育王山という山号、山号とは寺号の前につく名前だが、この阿育王山とつく阿弥陀寺はこのお寺だけだ。

お寺に向かう参道は二つある。塔之沢駅からの男坂と、箱根湯本駅からのルート上の女坂だ。阿弥陀寺の山門は男坂の途中にあるが、

本堂入り口に力かる転法輪は珍しい数珠車だ。



山門に阿育王山と彫られている。阿育王、確か歴史で習ったことがあるな、と思いながら参道というより山道を登った。塔之沢の駅から十五分と聞いているが、登り坂は不動産屋の広告同様、額面通りにはいかないようだ。

花が咲くのはもう少ししてからだが、お寺に近づくにあじさいが一面に植わっている。花が咲いたらさぞきれいだろう。降りて来た老夫婦が、もうすぐですよ、と励ましてくれた。いつも感じることだが、お寺にお参りする人は心優しい人が多い。ひと登りすると視界が一気に開けた。新緑の山を借景に阿育王山阿弥陀寺があった。『あじさい寺物語 水野賢世』という本を住職にいただいた。お寺を訪ねた時、ちようどお参りの方々とお話し中で、後ほど時間をとりますが、それまでこれを読んでいただければ参考になると思います、と手渡されたのだ。水野賢世とはほかならぬ住職のお名前だ。

さつそく『あじさい寺物語』を本堂前にある枯れ池前の椅子で開く。阿弥陀寺の歴史という項目が目次にある。ここを読もう。

『阿弥陀寺の開山は、木食遊行僧として知られる弾誓(たんぜい)上人であり、上人が籠った洞窟が、阿弥陀寺本堂の裏山三百五十メートルほど登った所にある。この洞窟で、慶長九年(一六〇四年)から慶長十四年までの六年間修行された。その間に、小田原城主大久保忠隣(ただちか)より境内地山林二十四町余(二十三万八千余平

方メートル七万二千余坪」の寄進を受け、阿弥陀寺を開いた。阿弥陀寺は山号を「阿育王山」という」

阿育王、どんな人だったか……。

「彈誓上人がある日、洞窟で一心に念仏を唱え、そして洞窟を出てみると、夕暮。紫雲たなびく右方面の山林が、何やら光っているように見える。そこへ行ってみると古い石塔が倒れており、その下に光っているものがある。杖で掘ると、五層の舍利塔が出てきた。これはインドの阿育（アショーカ）大王（紀元前三世紀、インドを統一して、仏教を守護した王）が、仏舍利（釈迦の遺骨）を納めるために造った八万四千の宝塔の一つで、日本には三カ所に置かれたという。この塔は、のちに丈余（三メートル余）の石塔を造り、その中に安置された。これが本堂横手にある「阿育王塔」である。」

なるほど、これが山号の由来であり、この塔からこのあたりを塔之沢と呼ぶらしい。

がらりと引き戸が開く。お客と笑いながら住職が出て来て、見送る。深々と頭を下げ、あるいは手を合わせ、お礼を言い帰って行く。入れ替わりに上がらせてもらう。

「仏さまはみせて下さいではなく、おがませて下さいが正しいです」こう達筆で書かれた紙が戸に貼ってあった。改めてご住職にご

みそやしぐれ、
土産がある。テレホンカードなどのお



挨拶をして、隣の本堂の本尊、阿弥陀仏に合掌一礼をする。張り紙を読んだせいかもしれないが、仏さまをおがむと落ち着くものだ。

「住職がお茶を入れて待っていてくれる。さて、何の話から聞こうか。と、がらりと戸が開いた。親子連れの観光客だ。朱印をもらいにきたらしい。住職が朱印を押していると、また来客。今度は常連さん、後で住職に聞いたのだが、阿弥陀寺を応援してくれる20人いる阿弥陀寺ファミリーの一人だそう。ここぞとまた外に出る。今日は一日時間がある。ゆっくり話を聞ける。そう、今のうちに弾誓上人の修行した洞窟を見に行こう。住職にそう言っていると、さらさら」と筆で地図を書いてくれた。

外に出ると今度は植木屋さんがいる。登山客もやって来た。日和もいいし、春休みのせい、山奥なのによく人が来る。

本堂のわきを抜け洞窟へ向かう。

塔之峰の標高は五百五十六メートル。塔之沢とこの塔之峰のちょうど真ん中に阿弥陀寺が位置し洞窟はお寺からかなり登ったところにある。お寺の裏の見事な竹林を抜け、急で細い登山道を登る。しばらくすると案内板があった。右が塔之峰、左が弾誓上人修行の洞窟。もうすぐだ。切り立った崖に洞窟があった。間口一メートルぐらいの入り口だが随分深い洞窟だ。六、七メートル入ると広い部屋がある。八畳ぐらいあるだろう。その横にも二畳ほどの空間がある。



住職自ら書いた「あじさい寺物語」には寺の歴史、住職の半生の生き様が綴られている。

どちらにも南無阿弥陀仏と彫られた石板や石碑が並ぶ。ここで弾誓上人が念仏を唱え、名号を彫ったのだ。弾誓上人は浄土宗の中でも捨世派といわれる僧侶だという。

捨世派というのは称念という僧侶がとえたもので、一定の道場（捨世地の寺院）を持ち、厳粛な規律のもとに念仏の一行のみに専念し、念仏の興隆につとめた僧侶を言う。

上人を慕う人々によって弾誓教団が作られ、幕府によって天台宗と浄土宗に分けられるまでの五十年間、その教団は続いたそう。いまでも弾誓高声念仏が残っているというからその影響力は相当のものだったのだろう。

この弾誓上人は髪、髭長く、つめは巻き貝のように伸び、ボロ衣をまとい、しらみを三千匹飼っていた、といわれるそうだが、一六一年に六十余歳でなくなるまでにいくつものお寺を建立、最後に京都大原の古知谷（こちだに）に阿弥陀寺を建てそこで入滅したという。この古知谷の阿弥陀寺もやはり塔之沢の阿弥陀寺同様、人里離れた山奥の、念仏三昧のための寺だという。普段から都会のお寺しか見ていないだけに、こうしたお寺を見ると驚く。

水野住職も世を捨てた僧侶なのだろうか。

『あじさい寺物語』にはそうは書かれていない。

水野さんの育った平塚の浄土宗の寺は木蓮や梅や桃が咲く寺で、

水野少年は中学生の頃よく鎌倉のお寺を巡った。水仙と梅の瑞泉寺、あじさいの明月院、竹の報国寺へ。次男だけど、もしどこかのお寺の住職になれるのなら草花の満ちあふれるお寺にしたいという夢が芽生えた。そして高校二年の時に肺結核を患い入院。一年半の入院中に、生きている人たちと、いろいろなことを仲良く語り合える寺を、と夢がふくらんだ。大学は大正大学。社会学科で社会事業を学んだ。入院中にいのちというものを考え、福祉や老人、非行少年、身体障害者に興味持った。だから仏教学科ではなく、社会学科を選んだ。こうして自分なりのお寺像を描いていた大学在学中の昭和42年2月の誕生日に、この阿弥陀寺と出会ったのだ。当時老僧と婦人だけで荒れざるを得なかったこの阿弥陀寺に24歳で入り、26歳で住職に。しかし檀家のないお寺の再考は簡単ではない。

下の道から自動車^が上がるようにと、道路作りを一人で始めた。二十年計画の大事業だ。湯本の旅館の身売りを聞き、その古材、古畳を持ち上げた。大好きな草花もかついで持ち上げた。あじさいは特に多い。生活のために書道教室を小田原、藤沢、湯本で開いた。もちろん奥さんも音楽の先生を辞めずに水野さんを支えた。お寺の歴史に自身の歴史^がオーバーラップする。学生時代に興味を持った易学を生かし人生相談もした。好きな詠唱（仏教讃歌）や踊りも続けた。『あじさい寺物語』にはこうした苦勞や人間との出会いが淡々



水野住職は今年53歳。まだまだやりたいことだらけという。

と厭味なく流麗なタッチで書かれている。

水野さんの生涯テーマは「人生いかに生きるべきか——心をみがこう」だという。ある信者さんにこう言われたことがあるという。

「和尚はこの寺に來た時の顔が一番良かったな。三十代、四十代はダメだった。五十を過ぎてまたこのごろ良くなって來た」こんな話を住職はお参りに來た人や觀光客にもさらっとする。しかも首から上に人間のすべてが表れると前置をしてからだ。興がのれば踊りも舞う。入り口に宗教舞踊研究所の看板があった。詠唱も浄土宗では有名な先生とも聞いた。とにかくいろいろな顔を持った住職だ。最近では念仏をたくさん唱えるより、お話しを大切にするという。

いろいろな苦勞を重ねられたのも、自分の夢である草花に囲まれ、誰とでも話ができる寺を作る夢があるからだ。彈誓上人がこの地で念仏を広めてから三百九十年の月日が流れた。社会とのかかわり方は違いますが自分の道を信じるかたくなな信念は彈誓上人も水野住職も変わらない。こうした信念がなければこうした山奥のお寺を守ることはできないのだろう。

あじさいの花を楽しむことはできなかったが、住職が一人で切り開いた道路、女坂を一步一步下りながら湯本へと向かった。

(ルポライター)

法然上人鑽仰会主催

別時念仏会並びに 研修会

「生前葬儀と人前結婚式」の報告

法然上人鑽仰会

さる三月九日、東京新宿区の太宗寺客殿にて、法然上人鑽仰会主催、浄土宗東京教区城西組教化団（嶋田順光団長）、同青年会（太田寛雄会長）の協賛、浄土宗太宗寺協力により、「別時念仏会」と「研修会」が開かれた。

当日は交通の便の良い会場、本誌『浄土』での事前告知記事もあってか、多くの信者、並びに僧侶が集った。

別時念仏は法然上人鑽仰会の牧田諦亮会長のお導師の予定



会場となった新宿区の太宗寺。

だったが、突然の法務で定刻に遅れることになり、代わりに松川文豪当会副会長の導師で開式となった。伝通院よりお借りさせていただいた木魚を参加者全員で叩きながら、僧俗一体となりお念仏を申し上げた。最後に松川副会長が阿弥陀さまの本願と仏国土についてのお話をされ、滞りなく「別時念仏会」が終わった。続いて『浄土』編集顧問である大室了暗浄土宗東京教区教区長により、『生前葬儀と人前結婚式』という演題で講演が行われた。

大室編集顧問は本誌平成六年五・六月合併号で「生前葬儀」と題し執筆いただいている。この記事は多くの方からの問い合わせ、あるいは面白かった、参考になったという反響をいただいた記事であり、ご参加いただいた方の中には、この記事を覚えていた方も少なくなかった。この講演に関してはその要旨を別掲する。

生前葬儀に関する突っ込んだ質疑応答が終わり閉会の辞となった。講演中に滋賀より到着された牧田会長が挨拶、四十五年の住職歴のなかで、たった一度だけ行えた臨終行儀のお話から、講演内容にふれられ最後に同唱十念で閉会となった。

紙面からのお礼で誠に恐縮ですが、会場を提供いただきました。太宗寺さま、仏具を提供いただきました伝通院さま、設営から撤去までいろいろとお手伝いいただきました、城西組教化団・青年会の皆様に厚く御礼申し上げます。

法然上人鑽仰会会長、牧田諦亮。



法然上人鑽仰会副会長、松川文豪。



生前葬儀と人前結婚式

大室了皓

《法然上人讃仰会主催公開講座講演より》編集部

生前葬儀とは生きている内に自分の葬儀を行うこと。人前（じんぜん）結婚式とは司祭（神道の神主、仏式の戒師、教会の牧師など）なしで参列者の前で結婚すること、である。

大室師はこのどちらも経験されているが、この二つのあまりなじみのない儀式の共通点を聞いてみた。

「二つのケースに言えることは、自分のために行われる儀式の意義や価値に納得したいという意識が非常に強かったことです。」

生前葬儀を行ったのは妙齢の女性で、良性ではあるがガンにおかされ、手術を何度も重ねている方。彼女は生前葬儀を行うことで、この身は娑婆にあっても心は浄土へと、心だけでも現世のしがらみから解放されたかったといい、他人に迷惑をかけたくなかったというのが動機となっていたようです。

大室師は東京白金の光取寺の住職をなされているが、この生前葬儀をされた方は光取寺のお壇家さん。しかもすでに戒名を授けている熱心な信者さんだという。依頼を受けた時に大室師は随分と悩まれた。このいきさつは大室師の「生前葬儀」（本誌



導師の横に座っているのが受者。



本堂内は花で飾られ、その中央に二河白道がつくられる。右が阿弥陀さま、左がお釈迦さま。



平成六年五・六月合併号)に詳しい。

人前結婚式は三十代後半のカップルだったという。

「新郎はわたしのかつての教え子で、アメリカと日本に半年づつぐらい生活する活発な男性、新婦はスチュワーズの方でした。二人とも初婚にしてはかなりの歳でしたから、結婚式には何度も出席している。二人が言うには、僕らは仏教徒でもキリスト教徒でもない。神式もどうも、と従来の結婚式に疑問を持っていた。そこでお手伝いをしたのですが、わたしが司会のような形で進め、参列者全員が司祭ということになるのです」

さて、どちらも自分なりの意義をそれぞれの儀式に求めたわけだが、やはり参加者の興味は生前葬儀。講演もその多くの時間を生前葬儀に割いた。生前葬儀の特徴だけをここに紹介する。まず受者(生前葬儀をする本人)に僅かな灯火だけの部屋で二河白道の掛け軸を見せ説明、一人しばらく端座させたあとの塗香、触香、灌頂のあと堂内に。そして、お釈迦さまの前から阿弥陀さまの前へとのばした白道を導師の後についてわたる。この前後に三札、焼香、十念、読経などが行われる。特徴はこの二河白道を渡る儀式だ。

講演のあとの質問も生前葬儀に集中した。お布施の額は、本当に死んだらもう一度葬儀するのですか、などなど。やはりやり直しのきかない人生最後の儀式である葬儀に、興味が集まった講演となった。



大室師(左)はあくまで司会的な役割だけである。

法然上人鑽仰会副会長・宮林昭彦師
当誌編集人

大本山増上寺御忌会日中法要 唱導師を厳修される



四月二日より七日の六日間、桜満開に咲き誇る大本山増上寺において、本年も御忌法要が盛大に行われた。

その最高に盛り上がる六日の土曜日の日中法要の唱導師を、当誌の編集人を永く勤めている、大正大学教授で神奈川教区京浜組大光院住職の宮林昭彦師が厳修した。

当日は天気にも恵まれ、大型バス五台に分乗した大光院の檀信徒をはじめ、二〇〇名を越す御随喜の上人が参集し、特に三大本山、長野善光寺大本願の一條智光上人、鎌倉光明寺の戸松啓真上人、京都百万遍知恩寺の大野忍敬上人が御随喜され、法要は一段と盛り上がった。

整然と行われたお練り行列に続き、荘嚴なる雰囲気の堂内法要は、緋衣の長素絹に身を包んだ我らが編集人、宮林師の威風堂々たる御勤めによって厳肅に行われた。

法要終了後の祝宴は、会場をお隣東京プリンスホテル鳳凰の間に移し、五〇〇名近い参



列者と共に、三大本山の御法主、鎌倉大仏の佐藤密雄貫主、成田有恒宗務総長を迎え、宮林師の偉業をたたえ、賑やかに楽しく行われた。

〈宮林師挨拶〉

この度神奈川教区からご推挙、教区長、センター長からの強いご要望がありまして、御忌唱導師の大役のご縁をいただきました。

半年前から準備に入り、このことがいかに多くの方々に迷惑をかけるということを実感致し、家内や副住職も相当に頭を痛めたようでございます。本日も九州など全国各地からお出で頂いておるようでございます、誠にありがとうございます。

また、大本山増上寺の職員をはじめ、京浜組のご住職はもとより、青年会の何十人という方々にいろいろなお骨折りをいただきました。終わってしまえば数時間のことでございますが、ひとつの行事を挙行致すことは大変

なことだなあとということを、今しみじみと痛感致しております。まさにご縁を頂いた喜びを感じているわけでございます。(中略)

今非常に難しい時代でございます。難しいというのは、やはり今宗教が見直されている時代だと思っております。政治の世界でも、あるいは経済の世界でも心が問われ、宗教がその役割を問われている時代でございます。その時期にこうして法要を勤めたわけでございますが、単なる御祭りで終わらせてしまうのではなく、これを機縁として、もう一度宗教を、心のあり方を考えて頂きたいと思ひまして、今日こうした席を設けさせて頂いたのでございます。

実はお手もとに小さな冊子を差し上げました。それは私が現在副会長をしております法然上人鑽仰会が今年六〇年になることから、そこで出しております月刊『浄土』の昭和十一年十一月号の「念仏読本」を今日復刻を致し、皆様にお配りしたわけでございます。



法然上人讃仰会は、昭和の九年、軍部が始動し、不況にあえぎ、民心は不安定であったそんな時代に、念仏を旗印に生まれました。当時の文壇を代表する佐藤春夫、中里介山、吉田絃二郎等々が執筆人に加わり、また椎尾弁匡、中村弁康、真野正順師といった今はなき大徳、また佐藤密雄師、中村御門主、成田宗務総長等が編集にあたって活動してきました。今この復刻にあたり感じますことは、やはり念仏の教えが五十年、六十年たっても不

変なんだということでございます。現在も『浄土』は若い編集者によって続いております。どうぞひとつこれもご縁でございますので、心のあり方、宗教のありかた、念仏者のありかたを考える手だてとして、ご支援頂ければありがたいと存じます。(中略) 今日お出で頂いた多くの方々にお礼を申し上げて、感謝の挨拶といたします。

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替001802145231

表紙は語る

野草花ごよみ

5月

ニオイタチツボスミレ

(スミレ科)

山の落葉樹林の日当りのよい場所にはえる。山野で一番よく目につくタチツボスミレによく似ているが、花の頃ずっと小さく(高さ5cm位)、花の色は赤紫が強く中心の白い部分が目立ち、芳香があることで区別できる。

撮影場所 東京都高尾山



もうひと花

ギンラン(ラン科)

落葉樹林の下にはえる。同じ属のキンランと並び称されるが、キンランよりずっと小さく(花の時、高さ5cm位)、花の咲くのも少し遅い。花はキンランと同様、全開することは少なく、半ば閉じている。生育場所、個体数とも少なく、環境指標の植物と言えそうである。

撮影場所 埼玉県新座市

表紙Photo/Report
石井敏之

カネが人生のすべてではないが、有れば便利。無いと不便です。便利のほうがいいなあ。「うーん……」。訪問したそのお寺のトイレで思わずうなづいてしまったのは、きつと私だけではないと思います。壁に掛けてある日めくりカレンダーには詩人・相田みつをさんの詩が載っていました。何の前ぶれもなしに心の扉を開けられたようで恥ずかしささえ覚えてしまった私。妙に納得させられる、また、反論の余地を全く与えてくれない、まさに秀作と言えます。

恐らく、これが万人の偽らざる気持ちでしょうね。衣食住、どれをとってもお金が先に出ていくのが現実。快適さを求めればそれにとまって出ていくモ

若和尚の

チヨットいいはなし 十三

ノも大きくなり、必然「もつとあればいいなあ」ということになります。

でも……。問題はここからだと思いませんか？ お金をうまく操っているつもりでいたのでしょうが、実はお金にいいように操られ、結果、足元をすくわれて派手に転んでしまった方々の名前が、殊にここ数カ月、連日新聞の紙面を華やかに彩っているのを目にします。まあ、こんなのは今に始まったことではありませんけど。

いつの世も同じ失敗、同じ過ち。原因はいつもおカネ。自分たちの生活をより便利に、より円滑にするために、智恵を働かせて人間が生み出したハズのおカネ。本来は人間につかわれる

ハズのおカネ。そのおカネが、生みの親も知らない間に強大なパワーをつけてきているんですね。否、親が情けないから、わずかなパワーに負けてしまっているだけと言った方が当たっているかもしれません。いやいや、もつと言え、おカネに負けたんじゃなくてただ単に自分に負けただけだ……。

いつそんな情けない親になつてしまふ危険性がないとは言えない私たち。相田さんの詩の奥には、人間は常におカネをつかう側にいなければならぬ、おカネの手綱を、自分の手綱をしっかりと握っていないければならないとの意味が込められているような気がしてなりませんでした。

(正)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

念仏往生

佐藤和順

私たち浄土宗信者の願いは、西方極楽浄土に往生すること。浄土宗とは、往生浄土宗ということでありましょう。法然上人のみ教えを信じさせていただいて、唯々お念仏を申していく。このことが大切なのであります。

私の知り合いに本当に念仏に生きられた和尚さんがいらつしやいました。少し変わった和尚さんというのが世間の評判でありました。浄土宗の僧侶であるからにはなにをおいてもまずお念仏。格好や見た目などはどうでもいいという和尚さん。浄土宗の僧侶として法式が大事なのは言うまでもありません。しかし、その和尚さんにとってはなにをおいてもまず念仏だったのです。

何度かお葬式をご一緒させていただきましたが、いつも背広姿で式場にあらわれ、時間になるとその上に衣と袈裟を羽織られるようなやり方を、その和尚さんは常としていらつしやいました。又難しいお経などは少し読んで、あとはひたすらお念仏。お念仏の最中でもお手洗いにいきたくなったら、法然上人の

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

(株) 島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八

FAX〇七五—三一五—三七五三

☎六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

厠の喩のごとくすつくと導師座をたたれて用をすまされ、またなにもなかったかのようにお念仏をお唱えする。このようにお念仏に生きられた和尚さんでありました。

その和尚さんが残念なことに一昨年、暑い盛りに亡くなりました。縁をいただいておつたので私もお通夜・お葬式に参列させていただきました。そこでご家族の方からお亡くなりになる瞬間のお話をおききました。それは次のようなお話でした。

八十代ももう後半、九十歳目前であつたその和尚さん。元気な和尚さんではありましたがよる年波には勝てず、お亡くなりになる

二、三ヶ月前から入退院を繰り返していらつしやつたそうです。ところがさうこうしている間に持病に加え色々な病気を併発してしまい、現代の医学ではもうどうしようもない状況にまで陥つてしまわれた。

しかし、さすがはその和尚さんであります。日頃から主治医の先生にも教化を忘れていなかったようであり、本当に駄目だな、もう危ないなと思われる頃に先生がご家族のかたに次のようにおっしゃつたそうです。

「私たち医者や看護婦は部屋の外で心電図を見させていただきますから、最後は方丈さんの好きなようになさってください。」

そう言つて心電図と点滴のみをのこしてあとの装置は外してしまい、本当に部屋の外へ出ていつてしまわれたそうです。

家族の方は家族の方で奥さまはじめ若和尚さんたちで、臨終の準備を始められた。阿弥陀様の来迎図を飾つて共々にお念仏を小さい声で、ゆっくりとゆっくりと唱え始める。「南無阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」

するとそれに応えるように、その和尚さんの口が、声は出ないけれどもお念仏をお唱えするが如くに動きはじめた。そのような状態がしばらく続いたかと思うと、それまで不規則だった心電図がだんだんとだんだんと力こそ弱いけれども、規則正しく落ち着くようになつてきたそうであります。そしてその和尚さんは静かに息を引き取られたということでありました。

後に落ち着かれて奥様は私にこうお話しくださいました。「住職は間違ひなく往生できたと思いますよ。間違ひなく阿弥陀様の御来迎、お迎えがいたただけたと思いますよ。だ

って本当に最後の最後までお念仏をお唱えさせていたのだいて、そのお念仏を信じていたお陰であんなに安心しきつた顔で安らかな顔で旅立たせていただいたんですもの。」その言葉が大変印象的でありました。

唯々深く法然上人のみ教え、阿弥陀様の本願を信じ日々お念仏を唱えてこられた和尚さん。法然上人のみ教え、阿弥陀様の本願を深く信じる心をもたれた和尚さんにふさわしい最後ではなかったかと思ひます。「南無阿弥陀仏」と唱えれば、来迎、往生は確かである。だから安心して生きられる、最後を迎えられる。この和尚さんの生きざまをみると、法然上人、阿弥陀様の本願を深く信じてお念仏することがいかに大切かということが良くわかります。

しかし先程の和尚さん程に深い信心をもつてお念仏することは、なかなか難しくそうである。如何ですか。私などは自分のことを顧みるに、すぐにこれほどの信心をもつというのは難しい。今すぐこの話を聞いたから深い

念珠



■ 伝承の技と心

念珠の修理・仕立替承ります。

○ アクセサリーの修理・加工・リフォームも承ります。

◆ カタログをご請求下さい。
「念珠年報」をお届け致します。



平野屋

本店 東京都文京区湯島4-5-3

☎ (03) 3811-4450 〒113

四谷店 東京都新宿区四谷2-8

☎ (03) 3355-2250 〒160

信心の心を以てお念仏をしなければならぬというのなら、私などは駄目でありましょう。頭ではわかっていても信心が、心がなかなか定まらないのです。

しかしそこは心配いりません。阿弥陀様の本願を深く深く唯々信じようという心持ちで、お念仏を唱えるならば、自ずから名号の功德「南無阿弥陀仏」の六字の名号の中に込められていくところの、阿弥陀様の大きなお力によって私たちの心が自然と調えられてくる。そして、知らず知らずに深い信心が備わってくるのです。ありのままでお念仏をしていると自ずから信がたつ、深い信心で、お念仏が唱

えられるようになると法然上人はお教えくださっています。

私たち念仏者の信心は簡単明瞭。本当にあれやこれやではない。一筋にそして単純素直に深く深く仰ぎ信じる。わかって信じるんではない。唯々「南無阿弥陀仏」と深く阿弥陀様にすがっていく信心。これこそ私たちの念仏する姿であります。私たちはただお念仏を唱えておけば良いのです。

このことを信じて法然上人について日々お念仏に精進したいお互いでありませう。

(広島福山市・定福寺副住職)

誌上俳壇

種袋振りてハーブの香をもらふ

内堀綾子（東京）

卓袱台の鍋あとしるき浅蜷汁

御忌の鐘往還一如と念念に

良誉一慧（埼玉）

花万朶いま法悦の極みとて

仰ぎみてまた俯きて春の空

春炬燵余白ばかりのはがき書く

父の背と思ふ彼岸の墓洗ふ

かげろふてゐる筈なりしわが相^{すがた}

中西泰代（長野）

児玉仁良（埼玉）

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-1216
振替 東京21176372

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の一冊此処に復刻成る

完全復刻

『浄土』昭和十一年十一月號特輯

念佛讀本

念仏者必携の書！

執筆者一覧

椎尾辨匡	佐藤春夫
中村辨康	小西存祐
佐藤賢順	稲垣眞我
大野法道	井川定慶
眞野正順	矢吹慶輝
石井教道	梅原眞隆
笹本戒浄	松浦一
島野禎祥	中野英善
江藤激英	

(目次登場順)

平成8年4月、
堂々の刊行成る！

【特別頒価 二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

事務局便り

新規会員紹介（敬称略 順不同）

一般会員

東京 北部組 西門寺

購読会員

東京 渋谷区 石山雄一

東京 渋谷区 中村芳子

東京 江東区 関 秀雄

東京 世田谷区 米沢啓子

東京 品川区 八木 勇

京都 右京区 板倉宏昌

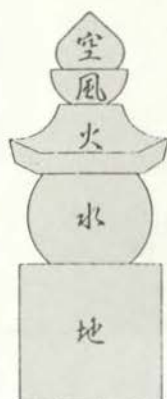
東京 品川区 後藤正三

東京 渋谷区 今野康夫

東京 練馬区 大熊春吉

東京 所沢市 勝目正昭

（平成八年二月末日）



日本の代表的卒塔婆メーカー

株式会社 協和木工所

〒190-01 東京都西多摩郡日の出町平井1316
TEL:0425(97)0732 FAX:0425(97)1816

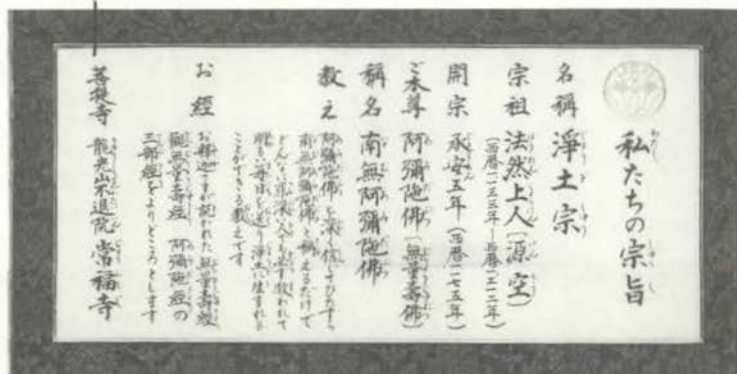
創業70年間の実績と
最高の品質

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の宗旨がよくわかる！

菩薩寺の名が入ります



注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話:03-3578-6947/FAX:03-3578-7036



寝転んで幻のごとき瑠璃の声

四月の終わりから、五月の第一週は、サラリーマン諸氏にとっては文字通りのゴールデンウィークであろうが、私のような編集人プラス寺の住職をしている者にとっては、誠にやっかいな十日間である。寺には法事がポツポツと入り、街はお店も開いていないなど、まったく仕事にならない状態が続く。それでは部屋にこもって書き物でもすればいいと思われるが、そうは家族、親戚等が遊びに来て許してはくれない。では気分を変えて遊びに行つてはといつても、寺というところはそんなことができるはずはない。どうもイライラするのでウイークである。

それでも自然に触れたときの気分だけは違ってくる。街がのんびりとしているせいもあるが、一年中てもっともすがすがしい、気持ちのいいこの時期、静かに耳をすませて鳥のさえずりなど聞いていたい気分の昼下がりである。

さて、今月号より冒頭に、法然上人の御法語の中から短い言葉、揭示伝道に利用できる程度のもので選び、大室了暗氏をはじめ、浄土宗総合研究所の研究員にお願いして書いてもらうこととした。一年ぐらゐの連載ができればと思う。

また、漱石の『こころ』を連載頂く今西順吉先生は、当会理事の松川文豪氏の義弟にあたられ、氏から特別のご推奨をいただいた。

また、坂爪逸子先生も松川氏の強い推薦によるものである。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川俊嗣

斎藤晃道

村田洋一

太田正孝

石上俊教

佐山哲郎

編集協力

オフィス須賀代佐山哲郎

編集顧問

大室了暗

浄土

六十三巻五月号 頒価六百元
年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷—平成八年四月二十五日
発行—平成八年五月一日

編集人—宮林昭彦

発行人—牧田諦亮

印刷所—株式会社 平文社

写真植字—株式会社 シータイイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七十四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三二五七八六九四七

FAX〇三三二五七八七〇三六



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

- いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、
こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり通車、
しっかり仕事する、しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

- 軽差、マルチリンクヒールサスペンション(リヤ)。
- うれしい低燃費※1500X1(5速フロアシフト)
18.2km/l、1500REZZO(アライマ)15速
フロアシフト18.4km/l、10-15モード燃費
※燃費基準値

らくちん

- 上置物のある、しなやかな乗りごこち。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン。
- トランク、ポケット等、収納性しゅふふ。

パルサー4ドアセダン
1500CJ(15速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X1(15速フロアシフト)

148.4万円

※燃費値は10モード燃費(リヤ)※燃費値は10モード燃費(リヤ)※燃費値は10モード燃費(リヤ)

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(税別、北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常ファン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。
③一状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO:パルサー4ドアセダン(1500X1)、ボディカラーはブルー・インフィニティパープル(※KG1)。スポーティパッケージは
メーカーオプション。●希望小売価格は消費税・標準工賃付。東京地方(税込)17万9千円となります。●保険料、
税金(消費税含む)、登録等に使う諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が
独自に決めますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 全国共通
フリーダイヤル 0120-315-332 ●おまめは、おまめのスカイライン、ブルーバード、日産チャイロ各販売会社へ。



みんな、自分の星を追いかけている。

駆けぬける 喉ごし。

息もつかせぬ爽快感。おいしいビールは、
喉をまっすぐに走ります。胸に一本の滝をつくります。
やすらぎと勇気をあたえてくれるもの。あなたの金星、黒ラベル。

サッポロ〈生〉黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



ご買取りの瓶・箱は、リサイクル会社による資源物の販売
として回収から下処理を経て使われています。

サッポロビール株式会社